

## 視覚障害者の方が生きやすい社会へ

小美玉市立美野里中学校

三年 石川友渚

みなさんは、「視覚障害者」について考えたことがあるだろうか。一年前、私はとあるアイドルグループの年の一度の視覚障害者に焦点をあてたラジオ番組を聴いていた。私は実際に視覚障害者の方を目にしたことが無かったこともあり、視覚障害者について深く考えたのはその日が初めてだった。

ラジオ番組放送から数日後。私は家族でテーマパークに行く機会があった。すると、人混みの中に盲導犬を連れた一人の視覚障害者の方を目にした。そのとき、私はパーク内のあることに気がついた。それは、広い敷地内に点字ブロックが数箇所しか見られないことだ。ラジオ内で視覚障害者の方の一人がよくそのテーマパークを訪れると話していたこともあり、視覚障害者の方はどうのようにしてこのパークを楽しんでいるのか疑問に思った。そこで、早速インターネットで調べてみると入園には健常者の付き添いが必要なことに加えて、施設

の場所がわかる触地図の設置やアトラクションに乗る前に乗り物の形状を確認することができるスケールモデル、音声で案内してくれるハンディガイドなど視覚障害者の方でも楽しめるようにと、様々な工夫がされていることがわかった。そしてさらに調べていくと、視覚障害者の方と健常者の方が実際にそのテーマパークを訪れた際の動画が出てきた。視覚障害者の方のようにパークを楽しんでいるのか気になっていた私はその動画を視聴してみることにした。そこには、段差の的確な声かけや、障害物の少ない、広くて安全な通路への案内など、助けが必要な場面では全力でサポートするキャストさんと付き添いの健常者の方の姿があった。もちろん物質的なバリアフリー設備はとても便利で必要不可欠だが、スペースの確保が困難だったり、経済的な問題があったりなどの様々な事情により設置されていない場所も多い。実際に、私の住む小美玉市でも駅のホームドアや音の出る信号機は一度も目にしたことがない。しかし、このテーマパークのように周りの人からのしつかりとしたサポートがあれば少しは安心して過ごせるのではないだろうか。いや、人のサポートこそが一番気軽に、誰もが作り上げることのできるバリアフリーなのではないだろうか。

この気づきをきっかけに数年前にお母さんが話してくれたエピソードを思い出した。それは、私の友達が下校途中に車道に出そうになっていた視覚障害者の方を歩道に誘導する様子を目にしたという話だ。私はこの話を聞いた時、心が温かくなった。人のサポートは視覚障害者の方の不安を減らすだけでなく、人の温かみも感じることができ、人と人の新たなつながりを生み出してくれるのだと思う。

この番組をきっかけに気づけたことは、これだけではない。私は、この番組で視覚障害者の方の話を聞いて、物質的なバリアだけでなく、目に見えないバリアに対する生きにくさというものを知った。これは「意識上の

「バリア」とも言われているらしい。先程、人のサポートこそが一番気軽に、誰もが作り上げることのできるバリアフリーなのではないかと述べたが、実際に視覚障害者への接し方がわからず、声をかけることができないという人がいるのも事実。また、声のかけ方によっては差別や偏見を感じさせてしまうこともあるそうだ。私はラジオ内での一人の視覚障害者の方の言葉が心に残っている。

「白い杖を持っている＝困っている人ではない」

白い杖とは、視覚障害者の方が前方の安全を確認するために持つ白杖のことだ。最近、視覚障害者の女の子を主人公としたドラマが放送されるなどして理解が広がり始めた分、障害者の方を目にすると、心配になって少しでも力になりたいと思う人も多い。しかし、大丈夫だと言われても無理に手伝おうとするのは違う。視覚障害者だからといって、いつでも困っているわけではないのだ。これも、偏見から生まれてしまったすれ違いだと思う。困っていたら助ける。大丈夫だと言われたら、相手に任せ、そつと見守る。これは相手が視覚障害者であっても、健常者であつても変わらないことなのではないだろうか。

私はこの一つのラジオ番組を通して、視覚障害者について考えるきっかけをもらっただけでなく、そこから沢山の学びを得ることができ、視覚障害者の方と共に生きているということにより強く感じる事ができたと思う。健常者の私は、実際に視覚障害者の方の気持ちを完全に理解することはできない。しかし、理解する努力はいくらでもできるのではないだろうか。これからは、この学びを心にとめて生きていきたいと思う。

視覚障害者の方が生きやすい社会をつくる。そのための一歩は思ったよりも身近で、簡単なことなのかもしれない。

## ありのままの自分を

小美玉市立美野里中学校

三年 石 崎 葵

「別に女になりたいわけじゃない。なりたい自分の理想像が、髪が長くてメイクをしたこの姿だった。」

私の好きなユーチューバーのルーティーン動画をいつものように見ていた時、サラッと耳に入ってきて、心に残った言葉だった。この男性は、女の子に見間違えるようなかわいい格好でユーチューブに登場し、百万人以上のフォロワーをもっている。女性である私が見ても憧れてしまうような、私なんかよりも女の子っぽい「男性」なのである。

それにしても、彼の言葉の意図は、女性になりたいのではなく、女装をすることがしたかった、ということなのだろうか。いや、そもそも髪を長く伸ばし、メイクをすることを「女装」と捉える私の感覚は間違っていないのだろうか。改めて考えてみると、私の頭の中で色々な声が聞こえてきそうな気がした。動画の中でささやかれたこの言葉を聞いて、私もいつしか、彼の考え方を理解したいと思うようになっていった。

私は、総合学習の時間にずっと気になっていたLGBTについて調べてみた。今まで「好きになる人が異性とは限らない」ことや「LGBT」という言葉について耳にしたことはあった。でも、実際にそのような人に出会ったことはなく、どういう気持ちなのか、どういう意味なのかはあまりよく分からなかった。調べてみると、

生まれたときから体と心の性が一致していない「性同一性障害」に悩む人がいること、「好きな人が同性であること」で社会において不当な差別を受けている人がいることなどが分かった。

多様な考え方があることを知るようになると、それまで何となく聞いていた周りからの言葉に、今まで感じたことのない違和感を感じるようになった。

「女なのに、男より男っぽいね。」

友達が言われたこの言葉を聞いた時、みんながみんな、笑って受け入れることができるのかな、という考えが浮かんだ。私は自分が女性であることを何となく自覚しているつもりである。私なら、「私は女だけど、他の女性とは違った、男性のような良さがある」と認められていると安易に思ってしまうかもしれない。でも、性同一性障害に悩む人がこの言葉を聞いたら、どんな気持ちになるのだろう、と心配してしまう。そう考えると言われた人の悩みだけでなく、その言葉を発した人にも、何かの感覚や責任を持たないといけないような気がしてくるのである。

私達は、毎日生活の中で「普通」という言葉をよく使う。「普通」というのは「他と特に異なる性質をもたない、ありふれたもの」という意味だ。「普通ならこうする」とか「普通じゃない」とかいう言葉を私達はよく使う。でも一人一人個性や特技、好きなことを持っている人たちに対して、「普通」という言葉を使って表現するのは違うと私は思う。

育った環境や考え方が違うなら、今まで思ってきた「普通」という言葉でひとまとめにすることなどはできず、他と違うことは当たり前なのではないだろうか。それなのに、自分に根付いた「普通」と違うものが現れた時、他者を受け入れることができないことが多いのではないだろうか。人の数だけ、その人の良さ、つまり「個性」があり、「価値」があると思う。「自分らしさ」は自分自身だけが持っているもので、他者がどうこう言うものではなく、自分が大切にすべき思いであると思う。

私が憧れる、このユーチューバーは「かわいくになりたい」と思い、そんな自分の思いを大切にしている、ありのままに生きている。そんなふうには私は捉えられないようになった。自分とは違うものを受け入れるのは簡単なことではない。今の日本は昔と比べて多様に変化しているとはいえ、曖昧な「普通」という考えに固執し、まだまだ差別や偏見で苦しむことを避けられない社会であるだろう。

それでも私はありのままの自分を、自分自身で大切にすることを続けていきたい。そして、ありのまま生きていく人たちともっとたくさん関わっていきたい。自分に無い良さをたくさん持っている、その人の良さに触れることは、自分らしさを大切にしていくなかでとても素敵なことだと、考えただけでもわくわくしてくる。それぞれにもっている「ありのまま」を決して否定せず、認め合っていくことが、多様な考えや価値をもつ私達が共に生きていく中でできることだと信じている。

